プラトナーを挟んで対峙するフィヒテとカント

――プラトナーの一七九三年版『哲学的アフォリスメン』、フィヒテの『論理学・形而上学講義』、そしてカントの「人間学講義」とレフレクシオーン群――

浜野　喬士

1　はじめに[1]

フィヒテは一七九〇年代中期以降、エルンスト・プラトナー（Ernst Platner、一七四四年生、一八一八年没）の著作を用いて哲学への入門的講義、いわゆる『論理学・形而上学講義』を行っていたことはよく知られている。一方で、このプラトナーが提唱していた「人間学」は、カントにとっては、一七七二年冬学期から開始した「人間学講義」以降、カントが自分の「人間学」を構想するうえで、自分の計画とは異なるものとして、繰り返し意識し、批判的に言及してきた、いわば仮想敵でもある。

本論文は、上記のような事情を念頭に、フィヒテとカントを直結させて論じるのではなく、そのあいだにあえてプラトナーを挟み、フィヒテとプラトナー、そしてカントとプラトナーという関係をいくつかの論点から考察してみたい。こうした作業を通じて、フィヒテとカントの思想的関係を考えるための、一風変わった哲学的視座というものを素描的に提供してみたいと思う。

2　フィヒテ『論理学・形而上学講義』

主に問題となるのは、一七九七年夏学期にフィヒテが行った講義のノートである『論理学・形而上学講義』と、その際に教科書として使用された、プラトナーの『哲学的アフォリスメン』の一七九三年版（以下、「一七九三年版」と略記）である。

フィヒテがこの講義に与えている性格は、知識学のそれとは当然異なる。フィヒテは次のようにこの講義の意図を述べている。「人間は世界を二つの異なった観点から見ることができる。一つは、通俗的（gemein）――軽蔑的で副次的な意味においてではなく――或いは常識の観点と呼ぶ

[1] 引用文中における［］は引用者による補足、［…］は引用者による略を意味する。カントの引用はアカデミー版（Königlich-Preußische Akademie der Wissenschaften (Hg.), [2]1910ff. ([1]1900ff.): *Kants gesammelte Schriften*, Berlin / New York: Walter de Gruyter.）に依拠し、巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で記した。『純粋理性批判』については第一版をA、第二版をBとした。（XIV LVII-LVIII）。フィヒテからの引用は、GA版、すなわちバイエルン科学アカデミー版全集（*J. G. Fichte-Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, Stuttgart- Bad Cannstatt : Friedrich Fromann Verlag）を用い、系列数、巻数および頁数をローマ数字およびアラビア数字で示した。

ことができ、――他方は、哲学的(philosophisch)観点と呼ぶことができる。哲学が答える問いは後者からのみ可能であり、そこにおいてのみ意味と意義を持つ」(Vgl. GA IV/1, 1)。さらにフィヒテは、この講義の想定聴講者について言及する。「ここでわれわれが視野においているのは、考える能力は持ってはいるものの、しかし、われわれがまず哲学的な観点に引き上げようと思う人々である」(Vgl. GA IV/1, 1-2)。

これらが講義の前提になった上で、フィヒテがプラトナーに対して与えている位置づけの端緒が示される。それは両義的な部分を含んだものである。「プラトナーは、明確に通俗的な観点に立つわけでも哲学的な観点に立つわけでもない。――従って、通俗的な観点に立つ人は誰も、プラトナーがおおよそ問題を見るような仕方で見ることであろう。われわれはそこから出発する。そして、それらを総合的に修正する。――これが哲学において唯一正しい方法である」(Vgl. GA IV/1, 2)。『論理学・形而上学講義』の全体は、ここでフィヒテが宣言している通りの調子で――すなわち場面によってはプラトナーの哲学的な構成の全面的否定も含みながらも、場面場面により是々非々で――進んでいくわけなのだが、そうした一見障害なく進んでいく議論を、プラトナーの著作の側から、さらにはプラトナーを経由してカントの側から見てみよう、というのが本論文の目論見である。

3　精神、頭脳、天才という論点、さらには哲学者と狂信者という論点をめぐる三者三様

さてプラトナー、フィヒテ、カントが交わるトピックとして、精神、頭脳、天才という問題を取り上げてみたい。これらに対する三者のスタンスを確認することは、私たちに一定の哲学的示唆を与えるだろう。その上で、私たちはこの問題が、「哲学者(Philosoph)」と「狂信者(Schwärmer)」というテーマと密接に繋がっていることを確認するだろう。

3－1　プラトナーの「哲学的精神」、「哲学的頭脳」、「哲学的天才」

「一七九三年版」の第三節で、プラトナーは哲学的精神について、次のように述べている。「思考の欠如を引き起こす、先述の奇妙な真の原因(第二節)[2]にもかかわらず、それでもなお、観察し、考える者。魂の内なる落ち着きのなさに刺激を受け、曖昧に感じとられた関心に突き動かされる者。そのような者の中には哲学的精神がある」[3]。また「哲学的精神は、外から目覚めさせられるよりも、内から目覚めているときの方が、より大きいものである。哲学的頭脳は、技術(Kunst)によって形成されるよりも、自然によって組織されるときの方が、より優れている」[4]とされる。

こうした議論を前提に、プラトナーは哲学的な精神、頭脳、天才の三つを次のように規定する。「[…]このような思考に必要な能力[同書第三節前半]を持つ人々は哲学的頭脳(philosophischer Kopf)を持っている。哲学的頭脳は哲学的精神に魂を吹き込まれると(beseelen)、哲学的天才(philosophische Genie)となる」[5]。こうした区分についてのフィヒテとカントの見解が問題になるわけである。

2　Platner 1793, S.3-4.

3　Platner 1793, S.4-5.

4　Platner 1793, S.5.

5　Platner 1793, S.5.

さて、この第三節で同書第二節を前提に思考の欠如を引き起こす原因とされているのは、世間に流通しているさまざまな意見や、物を深く考える習慣の脱落といった類のものである。「生まれた人間は、その肉体と魂の段階的な発達のもとで成長するわけだが、それは教育や実例を通じて彼に提示された意見に早くから取り込まれ、世界の光景や自分の現に存在していることの感情をなかば夢想しながらの成長なのである。しかし、気づかないうちに熟考の諸々の対象に向かう習慣が弱まり、かの大きな問い（第一節）のもつ刺激も弱まる。それは人生全体の完全な思考の欠如にまでたいてい及ぶものである」（「一七九三年版」第二節）[6]。ここでの「大きな問い」とは、「世界とは何なのか、その起源、本性、運命は何なのか、世界における人間の関係は何なのか、人間の現在と未来の使命は何なのか、死すべき被造物について人間に至るところで告げられている死という考え」[7]（第一節）のことであるが、これが成長の過程で後景に退いてしまう、というわけである。

いずれにせよ哲学的精神、哲学的頭脳、哲学的天才という三区分が、プラトナーの「一七九三年版」においては存在している。なお天才概念については、プラトナーの一七七二年の著作、『医者と哲学者のための人間学』の段階でもすでに論じられており、同書の第七篇「天才について」がその主要箇所である。そこでは天才が、一般的な観点からまず考察された上で、「観察における天才」や「構想力における天才」、そして「発明における天才」といった諸区分が検討され、さらに機知概念との関係が論じられる。また「人間学」という点で非常に興味深いのが、同篇の第六教説において、天才と身体の関係が考察されている点である[8]。

さて、「一七九三年版」に戻ると、同書の第五節でプラトナーは、精神と頭脳を、判明、曖昧という区分に引きつけて整理する。重要なのはこの議論が狂信者（Schwärmer）という問題を用意する点である。それは哲学者と対置される。「哲学的精神［…］は持ち合わせているが、哲学的頭脳［…］を持たない者は哲学者ではない。もし、腐敗した趣味や外部の関係によって、判明（deutlich）で整然とした概念で思考することができず、その結果、曖昧で（dunkel）混雑した（verworren）概念への傾向が生まれると、哲学者（Philosoph）ではなく狂信者（Schwärmer）が形成されることになる」[9]。

プラトナーの考えでは、精神はありながらも頭脳を欠くこと、それが狂信の道となる。「頭脳の独創性も心情の独創性も本当に備えた、すべての理論的狂信者は（というのもここで話題になっているのは欺かれた者でも欺く者でもない）、哲学的精神の本質である研究の衝動を自身のうちに感じている。しかし、彼らは独自の理念に事欠くということはないが、判明な概念の能力がない。彼らには精神がある。しかし彼らには頭脳がないのだ」（「一七九三年版」第五節）[10]。しかしながらプラトナーは狂信者に次のような留保を付けていることを念頭におく必要がある。「彼ら［理論的狂信者］は精神も頭脳もない何百人もの人々よりも価値がある。ほとんどの場合、狂信はしくじった哲学なのである」[11]。

6　Platner 1793, S.3-4.

7　Platner 1793, S.3.

8　Platner 1772, S.249-291.

9　Platner 1793, S.5-6.

10　Platner 1793, S.6.

11　Platner 1793, S.6.

3－2　フィヒテの見解

さて、一方フィヒテであるが『論理学・形而上学講義』の第三節で、彼は哲学的精神に言及する。またその文脈で頭脳と精神を比較するかたちで対置している。

「哲学的精神（philosophischer Geist）とは、上述の観点に達し既述の問いを持つようになった精神である。その問いにまで達していない人は、哲学者（Philosoph）ではない。生活の中で極めて役に立つ人間でありうるとしても、そうなのである。この問いに自分自身で答える人は、まったく確かに哲学的な精神である。頭脳（Kopf）は内的で特殊な才能（Anlage）であり、論弁（räsonniren）だけに関わる。頭脳を持っている人ならば、諸学問においてうまく上達するであろう。精神（Geist）を持つならば、彼は哲学者となるであろう」（GA IV/1, 24-25）。

ここで興味深いのは、フィヒテが、差し当たり哲学的精神と天才を重ね合わせていることである。同節には次のような文言が登場する。「哲学的精神と天才（Genie）は同じものである。それは通俗的な（gemein）見地を超えることである。通俗的な見地においては、人は精神を持たない。精神を持つのは、哲学者と詩人（Dichter）および芸術家（Künstler）だけである。これら両者［すなわち一方では哲学者、他方では詩人と芸術家］だけが通俗的な見地を超える。芸術家はそれとは知らずに、哲学者は十分な知を持ってである」（GA IV/1, 25）。このように、少なくともこの講義では、フィヒテは天才というものを芸術家だけではなく、哲学者にも認めているということになる。

われわれがすでに確認した通り、フィヒテのこの講義はプラトナーの「一七九三年版」に連動しているので、プラトナーの狂信者の議論についても、それを踏まえてフィヒテ自身の次のような言及が登場する。「狂信者（Schwärmer）は力（Kraft）を持つ。ただその力は秩序だっていない。頭脳と精神を持たない者にはさして力はない。従って、狂信者は単なる文字追い（Buchstäbler）よりは上である。但し、狂信者は自分と他人に対し危険になる恐れがある。それは平凡な頭脳のもとでは認められないことである。従って、平凡な頭脳はもっと役に立ちうる。哲学の部門の外でも狂信者は存在する」（GA IV/1, 10）。

3－3　カントにおける「天才」と哲学の関係

さて次にカントにおける精神や頭脳についての議論を考えてみたい。それらは基本的にカントの天才論の文脈で登場するものだが、カントにおける天才論、特に天才と哲学の関係は、カント哲学の生成史上、非常に複雑な経路を辿った。私はこの論点を、かつて詳細に検討したことがあり（論文「カントにおける天才概念の体系的位置づけ」[12]）、本論文に関係する限りでそれを、当該箇所を随時示しつつ、簡略に再述しておく必要がある（詳細な情報は註に記す）。

おおまかな流れはこうである。ごく単純化して言えば、当初、天才、数学、哲学はカントにおいて混然一体とした文脈で語られていた。つまり『判断力批判』の天才論にしか目を向けない場合、見えなくなってしまうことだが、カントにおいては、哲学的天才なるものがたしかに検討された時期があるわけである（たとえばレフレクシオーンの一六五〇番[13]、一七七二／七三年の「コ

12　浜野喬士、2018：「カントにおける天才概念の体系的位置づけ」、カント研究会、中野裕考、山蔦真之、浜野喬士編、『現代カント研究14：哲学の体系性』、京都：晃洋書房、64-85頁。

13　一六五〇番（一七六〇―七二年）の「諸々の技芸と模倣の学には飲み込みの良さが属する。哲学には天才が属する」という文言（XVI 65）等。

リンズ人間学」[14]、一七七五／七六年の「フリートレンダー人間学」[15]等）。しかし、当初こうした幅広い適用範囲を持っていた天才概念から、まず数学が排除された（レフレクシオーン一五〇九番での天才概念への疑問[16]、一七八一／八二年の講義録「人間論」での数学の排除[17]、八〇年代中後期のニュートンの評価変更[18]）。これに対して哲学については、ある時期まで天才の概念と結びつけて語られていた（後述の一六五一番）。しかしいわゆる批判哲学が形成されるのとほぼ時期を同じくして、哲学もまた天才と完全に分離するに至った（一七八四／八五年の「ムロンゴヴィウス人間学」における哲学と天才の分離[19]等）。これがカントにおける基本的な構図である。

プラトナーおよびフィヒテの上記の議論との関わりで、一七六〇年から七八年の間と推定されるレフレクシオーンの一六五一番だけ見ておこう。ここでは「哲学的精神（philosophischer Geist）」と「ある哲学の精神」という区別が登場する。そしてこの前者の「哲学的精神」が天才と結び付けられるのである。「＜ある哲学を学ぶこと（Eine Philosophie lernen）＞が意味するのは、主観的哲学ということであり、何が現実に考えられているか、ということである。しかしその場合、その哲学を判定することはできない。＜哲学することを学ぶこと（philosophiren lernen）＞は客観的であり、いかに考えるべきか、すなわち理性の正しい使用の諸規則である。それゆえ哲学的精神（philosophischer Geist）というものは、ある哲学の精神（Geist einer Philosophie）から区別され、理性の方法のうちに存することになる。したがって哲学的精神は独創的であり、すなわち天才である［…］」（XVI 65-6）[20]。このように一六五一番は、カントが哲学を天才にもっとも近づけた、いわば近日点とでもいうべき覚書である。私たちは「ある哲学を学ぶこと」と「哲学することを学ぶこと」という表現で、『純粋理性批判』「純粋理性の建築術」章を思い浮かべるわけだが、この覚書の時点では「哲学することを学ぶこと」が「哲学的精神」と呼ばれ、独創性[21]や天才と結び付

14　「コリンズ人間学」（一七七二／七三年）における哲学と独創性の結合を参照のこと（Vgl., XXV 164）。

15　「フリートレンダー人間学」（一七七五／七六年）における「哲学することへの天才（Genie zum Philosophiren）」や「天才の学（Wißenschaft des Genies」としての哲学といった記述を参照のこと（Vgl., XXV 556f.）。

16　レフレクシオーン一五〇九番（一七八〇年－八四年）「天才の諸学（Wissenschaft）が存在するのか、それともたんに天才の諸技芸（Kunst）が存在するのか」（XV 826）。浜野、2018、69頁。

17　一七八一／八二年講義録「人間論」での以下の記述。「良き数学者をひとは天才とは呼ばない。むしろひとは詩人たちのうちに天才を求める」（XXV 1061）。浜野、2018、69頁。

18　一七八四／八五年のムロンゴヴィウス人間学におけるニュートンの「偉大な才能（großes Talent）」（XXV 1311）への評価変更および、一七八八／八九年のブーゾルト人間学における次の記述を参照のこと。「通常ひとは傑出した頭脳を天才と呼ぶが、それは本来的ではない。一切の諸力の均衡を取る独創性が欠けているからである。ニュートンは偉大な頭脳であったが天才ではない。天才は、その固有の自由に応じて、構想力に向かう。才能、あるいは精神の能力は、習得されうるもの、獲得されうるものに向かう」（XXV 1497）。以上の天才と数学の関係についてのカントの評価の変遷に関しては、浜野、2018、68-71頁。

19　「ムロンゴヴィウス人間学」（一七八四／八五年）における「天才の事柄は諸規則にしたがって学ばれることがない。数学と哲学は、天才の事柄ではない」（XXV 1311）という記述を参照のこと。

20　浜野、2018、72-73頁も参照のこと。

21　独創性は『判断力批判』においても天才と結びつけられるが、それはあくまでいわゆる美や芸術に関わる概念であって、哲学とは切り離されている。独創性に関する『判断力批判』の該当箇所は以下。「天才は第一に、規定されたいかなる規則もそのためには与えられないようなあるものを産出する一つの才能（Talent）である。それは何らかの規則にしたがって学びうるものに対する熟練性の素質ではない。したがって独創性（Originalität）こそ、天才の第一の特性でなければならない」（V 307-8）。

けられている。こうした変遷の過程は、刊行された一七八一年の『純粋理性批判』や一七九〇年の『判断力批判』の段階になると見えなくなってしまうわけである。

4　「魂の座」をめぐる三者三様

さて最後に私たちは「魂の座（Sitz der Seele, sedes animae）」という問題をめぐる、プラトナー、フィヒテ、カントの三者三様の見解にも一瞥を与えておこう。これはライプニッツ、ヴォルフ流の心身問題に直結しつつ、プラトナー的な人間学構想のまさに出発点に触れている問題である。

4－1　プラトナーの脳論、神経論と、そこから距離を取るカント

プラトナーは「一七九三年版」の第六七節で、「魂の座」について次のように言及している。「内なる魂の器官（inneres Seelenorgan）、すなわち魂の座（Sitz der Seele）は、すべての感官の印象（Sinneneindruck）が終わり［…］、すべての身体の運動が始まり［…］、そしてすべての魂の作用一般が最初に外化される身体の場所［…］である」[22]。

この点、さかのぼれば一七七二年の『医者と哲学者のための人間学』でも「魂の座」は焦点の一つであった。プラトナーの人間学構想とカントの人間学の違いについて、私は、フィヒテの動物論をいわゆる『プラトナー講義』に即して論じるなかで、詳しく扱ったことがある（論文「フィヒテの動物論と一八世紀人間学」[23]）。そこでは「魂の座」についても触れていた。以下では、『論理学・形而上学講義』におけるフィヒテによるプラトナーの神経論の取り扱いを考えるにあたり、最低限必要な前提知識を押さえるという目的のために、プラトナーの一七七二年の人間学における記述と、そうしたプラトナー人間学に対するカントの距離感を、上記拙論の関連箇所を踏まえるかたちでごく簡略に再述しておく。

プラトナーの一七七二年の人間学において、心身問題は、脳論、神経論として展開される[24]。脳髄は「管からなる組織」[25]であり、神経はこうした管の束であり[26]、神経は自身の管の中に流れる精気（Lebensgeister）を伝達する役目を果たす[27]。この「精気」と呼ばれるもの、言い換えれば「神経液（Nervensaft）」[28]こそが精神と物体の中間的存在であり、脳髄は心身の交わる場所としての「魂の座（Sitz der Seele, sedes animae）」[29]となる。こうした理論をプラトナーは一七七二年の『医者と哲学者のための人間学』で展開した。

一方でカントは、こうしたプラトナーの人間学から距離を取った。プラトナーの名前を挙げて、これを自分の「人間学」構想と区別する一七七五／七六年冬学期の「フリートレンダー人間学」の以下のような記述はその典型例である。「人間を観察すること、人間の振る舞い、人間の現

22　Platner 1793, S.52.

23　浜野喬士、2014：「フィヒテの動物論と一八世紀人間学：プラトナー、カント、フィヒテ」、日本フィヒテ協会編『フィヒテ研究』22、京都：晃洋書房、96-111頁。

24　詳細については浜野, 2014, 103-105頁を参照のこと。

25　第147節。Vgl., Platner 1772, S.39-40.

26　第151節。Platner 1772, S.41.

27　第153節。Platner 1772, S41.

28　Vgl. Platner 1772, S.43, 92-3.

29　Platner 1772, S.49.

象を規則の下にもたらすこと、これが人間学の目的である。当世の諸々の人間学はみな、われわれがここでわれわれ自身に関し有しているような理念というものを持ち合わせていない。人間の賢き振る舞いに関わらないような一切のものは、人間学に属することはない。[…]プラトナーが展開してきたような、そこで諸観念が発生するようなものはみな思弁に属するのであって、人間学には属さないのである」[30]。また刊行された一七九八年の『実用的見地における人間学(*Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*)』においてもプラトナーの神経論、脳論を意識した消極的文言が残っている[31]。

４－２　フィヒテから見たプラトナーの「魂の座」論

さてフィヒテは、『論理学・形而上学講義』のなかで、プラトナーの神経論を念頭に、身体と魂の連関というプラトナー的問題の可否を扱うに先立って、次のように述べている。「プラトナーは、諸事物がどのようにわれわれに作用を及ぼすのか、どのように神経を通して印象を伝え、諸表象を生み出すのかについて論じている。これらの考察にわれわれは従うことはできない。なぜなら、それは独断論であり、物自体が想定されて、それがわれわれに作用するというのだからである。われわれにとってあるすべてのものは、われわれの思惟によってある。われわれがわれわれに身体、感覚を帰するということ、諸事物がわれわれに働きかけるということは、真実である。しかし、どのようにしてわれわれはこのことを主張するようになるのだろうか。この問いの解決がわれわれの研究の対象となるであろう」(GA IV/1, 373)。

このように『論理学・形而上学講義』において、身体と魂という問題は、フィヒテ的観点から、端的に言えば知識学的な構成に変換されて、議論される。それは具体的には、第一に「われわれ理性的存在者は、どのようにしてわれわれに身体を付与するようになるのか」(GA IV/1, 376)という問いのかたちを取る。その上で第二に「機械的に命じる理性法則に従って、われわれは表象に対するどれだけの関与をわれわれの身体に帰さねばならないのか」(GA IV/1, 385)が問われ、さらに第三に「感覚界における感覚的理性的存在者が可能なのは、その外に、それが認識と相互的影響という形で結合されている同種の存在者がなお存在するかぎりにおいてのみである」(GA IV/1, 392)という命題が続く。そして第四に「後者[客観]に関して言えば、私は外的器官を持つことなしには、これらのものに働きかけることはできない。外的器官は、私が働きかけるものと同じく頑丈である。それは、人間の物質的身体であり、特にわれわれにとっては手である。手はとりわけ感覚世界の諸客観に働きかけるものである」(GA IV/1, 396-7)という命題の検討がなされ、自我や自由な活動性の概念の提示がなされる。

30　XXV 472. これ以外の「フリートレンダー人間学」の注目すべき箇所、たとえば理論的、実用的という区分が登場したこと(Vgl., XXV 469)等については、以下を参照のこと。浜野, 2014, 106頁。

31　刊行『人間学』での文脈は、記憶力のような自然的原因の探求を人間学において行う者に対する非難、というものであり、それについてカントは「[…]脳神経や繊維組織を知らず、それらを自分の意図に沿って操作することにも通じていないのであり、したがってこれらの問題に関して理論的に理屈をこねることは、全くの無益である[…]」(VII 119)と述べている。なおカントが、プラトナー以外に、ハラー(カント『魂の器官について』においては、ハラ―への言及箇所がある。Vgl., XII 34)や、ツィマーマン(ツィマーマンとプラトナーは1769年に面識がある。Vgl. Košenina 1989, S.131)らの学説を想定している可能性については、以下を参照せよ。Vgl., Zammito 2002, S.250-3. 浜野, 2014, 111頁。後者については、特に註48を参照のこと。

5　おわりに：展望など

本論文が今回触れられなかった論点は無数にある。

第一に、フィヒテのプラトナーへの反応を、より網羅的に究明することはできたはずだが、それは着手できずに終わった。そこには他の講義録も含まれるはずであり、また『論理学・形而上学講義』と「一七九三年版」の対照関係についても、それこそ「一七九三年版」の全章立てと比較して検討する作業が必要だろう。

第二に、より一般的な哲学史的文脈において、プラトナーの一連の人間学やアフォリスメンがどのように受容されたのか、という問題意識のなかで、フィヒテのプラトナー理解の特異性を浮き彫りにする、という作業もできなかった。

第三に、より限定された意味でのプラトナー研究という観点からは、「一七九三年版」が彼の他の著作、とりわけ近い時期の著作である一七九〇年の『医者と哲学者のための新しい人間学(*Neue Anthropologie für Aerzte und Weltweise*)』(『新人間学』と略記)[32]とのあいだでどのような関係に立っているのかを解明することも重要だができなかった。これはプラトナーにおける人間学概念の変遷ないし展開という核心的問題に触れる課題と考えることもできる。というのも、プラトナーはこの一七九〇年の『新人間学』において、一七七二年の『医者と哲学者のための人間学(*Anthropologie für Aerzte und Weltweise*)』の見解を大幅に変更したと宣言しているからである。「一七七二年に出版された私の人間学が称賛をもって迎えられたことに対して、たしかに私は感謝の念を抱いていないわけではない。もっともそれをこの作品の内容から説明することはまずできず、もっぱら当時このような種類の著作が珍しかったから、という理由から説明するしかない。まだ十分に研究されていないが重要だと見なされている対象を扱っている場合、研究の素材が十分に行きわたり、あるいは汲み尽くされているような領域における傑作よりも、まったく取るに足らない試論であっても、学問の世界で歓迎されるということがままあるのである。実際あの人間学[一七七二年の『医者と哲学者のための人間学』]は、いくつかの許容できる教説と、おそらくいくつかの新しい理念を除けば、まったくもって誤りの多い本であった。[…]私に関して言えば、この本をもう数年来、まったく見ていないし、今回の新しい本の執筆作業にあたっても、ほとんど一度も開いていないといった状態であり、ましてやそれを基礎に置くといったことはないと断言できる。したがってこの目下の新しい人間学[『新人間学]]は、旧版の改訂版や増補版ではない。この新しい人間学はそれらから完全に区別される、まったく独立した本なのである。それは著者が同じである以外には何の共通点も持たず、またタイトルが似ているという以外には、何の類似点も持たないのである」(『新人間学』)[33]。だとすれば、こうした人間学の方面での見解の大きな変化が、一連のアフォリスメンの展開に、特に『新人間学』後の「一七九三年版」に何も影響を及ぼさなかったというのは考えにくいだろう。

第四に一八世紀後半のドイツにおいて、「人間学」という学問がどのような広がりをもっていた試みであったのか、という方面からの検討が必要だろう。これらはいずれも稿を改めて考察する

32　Vgl., Platner 1790.

33　Platner 1790, Vorrede.(原著の当該箇所に頁の標記なし)。

予定である。

参考文献表

Angelis, Simone De, 2010: *Anthropologien : Genese und Konfiguration einer 'Wissenschaft vom Menschen' in der frühen Neuzeit,* Berlin /New York: Walter de Gruyter.

Brandt, Reinhard, 1994: „Ausgewählte Probleme der Kantischen Anthropologie“, in: Schings, Hans-Jürgen(Hg.): *Der ganze Mensch. Anthropologie und Literatur im 18. Jahrhundert,* Stuttgart: J. B. Metzler, S. 14-32.

Brandt, Reinhard, 1999: *Kommentar zu Kants Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*(*1798*), Hamburg: Felix Meiner Verlag.

Euler, Werne, 2007: „Commercium mentis et corporis? Ernst Platners medizinische Anthropologie in der Kritik von Marcus Herz und Immanuel Kant“, in: Naschert, Gudio / Stiening, Gideon (Hg.): *Aufklärung. Band 19. Ernst Platner. Konstellationen der Aufklärung zwischen Philosophie, Medizin und Anthropologie,* Hamburg: Felix Meiner Verlag.

Košenina, Alexander,1989: *Ernst Platners Anthropologie und Philosophie. Der "philosophische Arzt" und seine Wirkung auf Johann Karl Wezel und Jean Paul*, Würzburg: Königshausen und Neumann.

Naschert, Guido / Stiening, Gideon, 2007: *Ernst Platner* (*1744-1818*). *Konstellationen der Aufklärung zwischen Philosophie, Medizin und Anthropologie*. Aufklärung, Band 19, Hamburg: Felix Meiner Verlag.

Nowitzki, Hans-Peter, 2003: *Der wohlemperierte Mensch. Aufklärungsanthropologie im Widerstreit*, Berlin, New York: Walter de Gruyter.

Platner, Ernst, 1772: *Anthropologie für Aerzte und Weltweise. Erster Theil*, Leipzig: Dzckische Buchhandlung.

Platner, Ernst, 1776: *Philosophische Aphorismen: nebst einigen Anleitungen zur philosophischen Geschichte. Erster Theil*, Leipzig: Schwikert.

Platner, Ernst, 1790: *Ernst Platners Neue Anthropologie für Aerzte und Weltweise : Mit besonderer Rücksicht auf Physiologie, Pathologie, Moralphilosophie und Aesthetik. Erster Band, Leipzig* : Bey Siegfried Lebrecht Crusius.

Platner, Ernst, 1793: *Philosophische Aphorismen nebst einigen Anleitungen zur philosophischen Geschichte. Erster Theil*, Leipzig : Schwickert.

Warda, Arthur, 1922: *Immanuel Kants Bücher*, Berlin: Martin Breslauer.

Wolff, Christian, 1732: *Psychologia empirica*, Francofurtum u.a.: Renger.

浜野喬士、2014：「フィヒテの動物論と18世紀人間学：プラトナー、カント、フィヒテ」、日本フィヒテ協会、『日本フィヒテ研究』22、京都：晃洋書房、96-111頁.

浜野喬士、2018：「カントにおける天才概念の体系的位置づけ」、カント研究会、中野裕考、山蔦真之、浜野喬士編、『現代カント研究14：哲学の体系性』、京都：晃洋書房、64-85頁.

フィヒテ、ヨハン・ゴットリープ、山口祐弘訳、2013：『フィヒテ全集』第８巻、『論理学・形而上学講義』、入間：晢書房.